



入笠山のミサヤマチャヒキ

会長 勝山輝男

今年(2024年)の6月例会は6月11日に信州の入笠山で実施した。入笠湿原の縁のズミは満開を過ぎてはいたが、遠目にはまだ見ごろであった。そのほか、レンゲツツジ、イボタヒョウタンボク、スズラン、ユモトマムシグサ、クリンソウ、サンリンソウ、ヒメヘビイチゴなど、花の種類は豊富であった。

それらの中でもっとも印象深かったのがミサヤマチャヒキである。入笠湿原周辺の樹林内や林道路傍などに多数が生育していた。円錐花序をつけ、1小穂に2~3個の小花があり、護穎に長芒があり、小花の基盤や小軸に毛があることなど、一見するとカニツリグサに似たところがあった。フォーリーガヤやミサヤマチャヒキなどの名前をあげたが、現地では同定には自信が持てなかった。帰宅後に平凡社のイネ科植物図譜で確認したところ、ミサヤマチャヒキと確定した。

ミサヤマチャヒキ *Helictotrichon hideoi* (Honda) Ohwi は長野県特産のイネ科植物で、長野県中部の八ヶ岳~霧ヶ峰、南アルプス北部、奥秩父の狭い範囲に分布し、標高 1300 m から 1800 m あたりの林縁や明るい樹林内に生える。

小泉秀雄が1921年に三才山(みさやま)で採集したことから和名がつけられた。本多正次が *Avena hideoi* Honda と新種記載し、その後、ミサヤマチャヒキ属 *Helictotrichon* に移された。ミサヤマチャヒキ属は日本にはミサヤマチャヒキ 1 種のみがあるが、世界には約 100 種ほどがある。三才山は美ヶ原の北方にある標高 1605 m の山である。ミサヤマチャヒキがあるので、その存在を知っているが、一般にはあまり知られていない山である。松本から上田に抜ける国道 254 号線がこの山の下をトンネルで抜けている。

入笠山産のミサヤマチャヒキの花序と小穂の図を示した。形態の概略は以下である。根茎は短く、稈は叢生し、高さ 50~90 cm。稈につく葉は平らで、葉身は長さ 5~10 cm、幅 2~6 mm、鞘部は節間よりも短く、葉鞘は有毛。葉舌は高さ 0.5~1 mm、縁には短い毛が列生。円錐花序は長さ 6~10

cm、先は垂れ、1節に1~2本の枝を出して各枝に1~3個の小穂をつける。小穂は長さ 8~12 mm、幅約 5 mm、第1苞穎は長さ約 4 mm で1~3脈、第2苞穎は長さ約 7 mm で3脈、3~4小花があり、その基盤には長さ約 1 mm の毛があり、小軸にも毛がある、護穎は長さ 7~8 mm、5~7脈があり、先は浅く2列し、中肋の上部より屈曲する長い芒が出、芒は長さ 12~15 mm。内穎は護穎よりも短く、2個の竜骨上に短毛が列生する。

カニツリグサ *Trisetum bifidum* (Thunb.) Ohwi は円錐花序は小穂を密につけ、小穂は長さ 6~8 mm とやや小さく、護穎の先は深く2裂して尖り、その間から芒が出る。北海道~九州に分布し、草地や路傍にふつうに見られる。

フォーリーガヤ *Schizachne purpurascens* (Torr.) Swallen subsp. *callosa* (Turcz.) T.Koyama et Kawano は葉は細く(幅 1~2 mm)で無毛、円錐花序の小穂は数個で、護穎の芒は直立する。北海道・本州中部以北に分布し、亜高山帯針葉樹林下に生える。長野県では八ヶ岳周辺や南アルプス北部に分布するので入笠山にあっても不思議ではない。



図 ミサヤマチャヒキ 上段：花序 下段右：小穂 下段左：苞穎と3個の小花を分離したところ 下段のスケールは5mm